## (四) 南海と悪い嫁

麓の村のある家で嫁をもらつたところ、姑との折合が悪く、ことあるごとによく角をたてて争つた。それでも嫁は老人のことだからと思いがまんしたが、二人の仲は良くなるどころか増々悪化するばかりであつた。嫁はいろいろと考え夫にも相談したがよい解決法はなかつた。さんざん思いつめた嫁はとうとう姑を亡きものにせんと思うようになつた。でも世間体もあるので、世間の人々に怪しまれないで死にいたらせる方法はないものかと考えたが良い案が浮いてこなかつた。

ある日嫁は、ふと米ケ森の南海にたのんだらと思い、家の人々にみつからぬよう、白米三升をもつて南海の庵を訪ずれ事情をこまごまのべようとしたら、南海は「その方の願いはよくわかつている、白米三升は先ず神前に供えよ」という。嫁は驚いてしまつた。おそるおそる白米を神前に供えると、南海は「きようはは米がなくて困つていた、早速いただいて御飯にしよう」といい、五合程を鍋に入れて炉にかけながら「そなたの姑は、今年八、九月頃必ずころりと倒れるぞ」という。嫁はその言葉に大変喜んだ。南海はそれをみて、「本当に死ぬだろう、米一俵で祈禱してやろう」「米は一俵どころか、二俵でも三俵でもあげます、どんな方法ですか」と顔を輝かせて進みよる。「それでは私のいうことをよく守るかどうか」、「よしそれでは教えよう、今はちようど種蒔の季節だ。種をまいて良い実をとるには手入れが大切なように、何ごとも姑にていねいにつかえることが第一じや。第二は悪人の姑ではあるが、誠をもつて仕えなければならない。この二つを守れば間違いなくころりとゆくだろう」、それを聞いた嫁は安堵し「その二つなら簡単に守れます」という。南海は神前の白米に呪文をかけそれを五、六合程嫁に与え、「これを毎日の飯にひとつまみずつ入れて家内一同食すべし、姑は悪人なる故に食うと病にかかるが、他の人々には薬となり増々丈夫になる。では明日より行え、ただし二つのことをよく守らぬと望むような効目があらわれないだろう。このことは他人に知らせたり、米を入れるところを見られてもいけない、ただの五ケ月間守ればよいのじや、つらくともよく辛抱せよ」とこんこんとさとした。嫁は嬉しさでわくわくしお礼もそこそこ庵を去つた。嫁は先ず実家により、姑の好めるものをあれやこれやと用意して帰り、何事も姑の心にかなうようかなうよう工夫して仕えた。

そうして僅か一ケ月程たつたら、今まで朝から晩まで嫁の悪口をいいふらしてあるいた姑がなんと嫁をほめだした。これには近所の人々も全く驚いた。姑のいうには、嫁はもう朝早くから夜おそくまで働き、私には実子も及ばぬようにかゆいところに手のとどく如く、よく面倒をみてくれるというのだ。

それからまた半月程たつたら、姑は進んで毎日孫の子守りをしたり、一回も子を出したことともなかつた家事の手伝をしたりするようになつた。その上家に伝わる帯までだして嫁にくれる仕末、こうなると姑もまるつきり悪人ではなさそうなので、嫁は心苦しくなつてきた。あれ程憎い憎いと思つておつたのに、発病するという盆が近づくにつれて、なんともなく過ぎてくれれば良いがとまで思うようになつていた。ところが盆に入つて、余り天気が続いたせいか、姑は暑気あたりのようになり、二日たつても三日たつてもなおらなかつた。嫁はこれは米ケ森の神にお願いしたためと思い、ああもつたいないことをした。なんとかして救うことはできぬものかと、夜も床につかず看病した。だが病は思うように快方に向わなかつた。嫁はとうとう米一俵を馬につけ南海の庵を訪れ「どうかあの願いをもとに戻して欲しい、姑の命をどうにかして救つて下さい」と涙を流して願う。南海は戻しの祈りは七日七夜続けなければならない難儀な祈りじやといい、いま一俵米をもつてこなければならぬといい聞かせると、「はい、必ずもつてきます。姑は全く心はなおり、今は少しの悪心ももつていません。どこをさがしてもあの位親切な姑はいないと思います。必ず必ず救つて下され」と真剣にたのむ、とても四ケ月前ころりとやつて欲しいと願いにきた嫁とは思われない。南海は神前より米をさげてきて「この米をいつて、一同毎日食べなされ、これは毒消しになり、姑は一日一日と良い方にむかうだろう。尚七日七夜祈れば姑の病は全快し長命を授かるだろう」といい聞かせた。

嫁は、ほつと安堵の胸をなでおろし、米をいただいて、家に帰つた。七日七夜の祈りが効いたのか、姑の病はうそのようになおり、姑と嫁はむつまじく暮し、家は栄え姑は長寿をもつてなくなつたという。